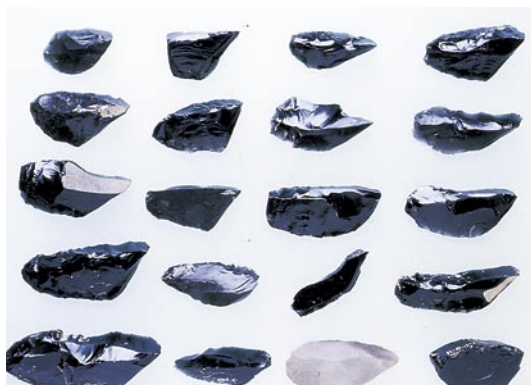




黒曜石で作られた石器
(白滝村)



朱円周堤墓 (斜里町)



●お問い合わせ先
モヨコ貝塚：網走市立郷土博物館
Tel. 0152-43-3090
常呂遺跡：ところ遺跡の館
Tel. 0152-54-3393
朱円周堤墓：斜里町立知床博物館
Tel. 01522-3-1256
白滝遺跡群：白滝村教育委員会
Tel. 01584-8-2963

使っていない大型の網を持ち(後世のアイヌ民族・ウィルタ民族・ニヅフ民族も持たない)、ブタ・イヌを食用家畜として飼育し、海獣を多く狩猟していた。住居は、同時代の擦文文化と比較すると、およそ3倍の広さを持ち、六角形で、家の中には熊の祭壇がおかれていた。その家では、複数の核家族(一家族5人くらい)から形成された一団で生活していたものと思われる。

このようなオホーツク文化が、変容・消滅した原因は、擦文文化による影響があらうことは、「オホーツク文化から擦文文化へと変容を遂げつつある段階の文化」といわれる「トビニタイ文化」が、現在の網走と釧路を結んだ線の東側で見られることから推測されるが、いつどのように消滅し、オホーツク人がその後どうなったか、そのルートとともに、いまだ謎に包まれている。

いまや世界の白滝といつてよい遺跡が、オホーツク海にそそぐ湧別川とその支流支湧別川の流域、白滝村にある。90カ所以上もの旧石器時代の遺跡があり、「白滝遺跡群」と総称されている。白滝村は黒曜石の原産地であり、標高1147mの赤石山一帯には、アジアでも最大級で、埋蔵量数十億トンとも言われる黒曜石の露頭が見られる。そして、その周囲には、質量ともに豊富な遺跡がある。2万年前の後期旧石器時代の石器は、道内では渡島地方、道外では400km離れたサハリンで発見されており、また縄文時代には、青森三内丸山遺跡、北方ではアムール川の河口に近い遺跡でも確認され、東北アジア一帯で使われていたことが予想される。ロシアの共同研究者からも、白滝産黒曜石製石器製作の技術や流通の調査が提唱されており、注目されている。

オホーツク文化研究の出発点

オホーツク文化の代表的な遺跡であるモヨコ貝塚は、大正期から米村喜男衛が、精力的な調査・保存活動を行い、オホーツク文化研究の出発点となった遺跡で、1936(昭和11)年、国の史跡に指定されている。

1941(昭和16)年、海軍基地建設工事の時、数百体の人骨が出土し、1947(昭和22)年からは、3回にわたり東京大学、北海道大学、網走市立郷土博物館の共同調査団により、貝塚の一部と竪穴住居跡数基が発掘・調査された。ここで発掘された人骨は、北海道でそれまで知られている人骨とはタイプが異なり、現在、オホーツク文化を担ったオホーツク人と呼ばれている。



モヨコ貝塚 (網走市)